

『持たざる国』の資源論

食料自給率は約4割で、必要とするエネルギー資源の9割以上を輸入に頼る国。「日本は資源に乏しい」と当たり前のようにいわれるが、本当だろうか。そもそも「資源」や「資源問題」とは、何を指すのだろうか。本書はそうした疑問に答える研究の集成である。

膨大な資料から著者はまず日本人の資源観を振り返る。「資源」という言葉を日本でいち早く使い始めたのは陸軍だったという。資源「モノ」であり、不足しているモノは海外で確保しなければならぬ、と海外侵略が正当化された。「持たざる国」という形容も、対外膨張論に都合のよい、ある種のイデオロギーだったのだ。

戦後は「経済至上主義」政策がそつした資源観を引き継いでいく。かつて日本の多くの村では、風土に合わせた資源利用を持続させる知恵や工夫があった。しかし近代化で海や森は分断され、不足する原料は海外から調達することに力が注がれる。その結果、埼玉県の総面積を上回る耕作放棄地が生まれ、森林や石炭が放棄された。「それらを資源として生かそうとする人々と知の放置」でもある、と著者は憤る。原発への「慎重さ」が薄れ、原発に依存しなくて

知恵や工夫 再構築するヒント

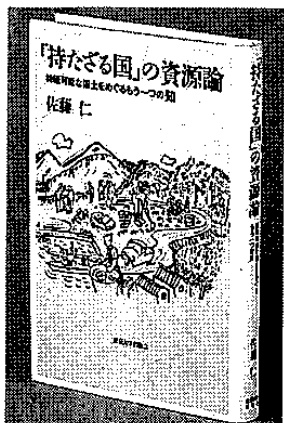
はならなくなった背景にも資源論はかかわっている。

資源「モノ」という主流派の考え方に、異議を唱えた人々にも光を当てる。たとえば石橋湛山は「天然資源は与えられるものではなくして、作るものである」「目を開いて見よ。何をもち、日本に原料なく、資源なしと説くか」と問うた。かつて政府の資源調査会で働いていた人々へのインタビューでは、多元的で豊かな資源論が語られる。

東日本大震災からの復興に際し、いまあらためて資源とは何か、が問われている。いかに暮らし、どのような社会を後世に残すのか。それを地球規模で考える必要に迫られている。新たな「資源論」を構築するヒントが詰まった一冊だ。

評・大原悦子(ジャーナリスト)

佐藤 仁 著



東京大学出版会
2940円

◇さとう・じん 1968年東京都生まれ、東京大准教授。
著書に「稀少資源のポリティクス」など。